戦争体験について

小山　安次

昭和十五年五月二十日　私が大阪市西淀川区大仁東一丁目で地銅商の独立営業を初めて間もないころでした。そのころ、日本国中は日中戦争の勃発のため、戦雲急を告げ、私は当時在郷軍人会の役員をしておりましたが、ほとんど毎日出征軍人を見送っておりましたが今度は、ついに自分のもとに召集令状が届いたのであります。家族は妻と長男（三歳）、店員二名でありました。

入隊日　昭和十五年六月十日

場所　京都第十六師団福知山歩兵二十連隊

所属部隊　第百十六師団志摩部隊所属小田島部隊本部付

当時、兵役の規定は、男子は満二十歳で兵役のため身体検査を受けた。結果、甲種合格になったものに限り、本籍地所定の部隊に現

役兵として入隊する許可が決定し、その上、中等学校の出身者に限り幹部候補生となり順次、将校に進級するという原則でありました。この規定も戦争の進展で急に緩和されました。この結果、私は甲種合格者で高等小学校の出身であるため昭和四年一月十日に京都第十六師団第十六連隊第二中隊に入隊して、陸軍輜重兵（食糧を輸送する兵隊）として専門教育を受けたのであります。昭和十五年六月十日、私は、陸軍輜重兵下士官適任上等兵として、同志三十八名が共に応召入隊したのでありますが、なぜか私一名だけが、即日、陸軍輜重兵伍長に任官を致しましたのであります。

私は、早速、その日から当時北陸地方から徴発された馬ひき係として、馬、三百頭と輜重兵特務兵（輜重輸卒）三百五十名の指揮官として、毎日、各将校と同じように命令を受けることとなり、その責任の重大さを今さらながら痛感しました。ところが、私の部下の

全員が輜重輸卒であり、その各隊員の身分はいろいろでありまして、大会社の重役さんや大所帯のだんなさんやヤクザ屋さん等、徴兵検査で乙種や丙種等の人たちの集団でありました。

私の身近な部下の十名位は、私の住所と同じ乙訓郡（長岡京市）の人たちで大変懐かしく、また、心丈夫でありました。当時の輜重輸卒と言えば、俗語に「輜重輸卒が兵隊なれば、トンボ、蝶も鳥の内、電信柱に花が咲く」と、言われたように世間から比喩されたような、全く特殊な集団であり、第三者には理解されぬ最も信頼できる楽しい同志でありました。

昭和十五年七月末ごろこの大部隊は、人馬、車両のすべてが大阪港天保山埠頭に終結を完了して、家族、その他の人々に最後の惜別をして、一路、朝鮮海峡に向かって出航しました。私たちは、ソ連向けの部隊としての内命を受けておりましたところ、その夜半、玄

海灘の真ん中にて航行停止命令を受け、直ちに上海に向かって航行せよとのことでありましたが、ちょうどそのころ、玄界灘はものすごく海が荒れ狂い、一同、生きた心地がしませんでした。私もこんなことは、初めての経験でありましたが、平素から飛行機、自動車等、乗り物酔いには大変強い自信がありましたので、こんな場合でも自分の任務遂行には支障はありませんでした。

ところが、三百五十名の兵員の内、船酔いに堪えられる者を調べたところ半分位の一二〇名位で、残りは船底の中央部に寝ころんで波の静まるのを待つしか致し方なく、私は、それぞれ作業の分担を申し渡し、必死になってその責任を完結しました。

夜明け近く波もしばらく収まり全員の元気も回復して、船は一路上海に向かって揚子江を進行しました。

ところが、午後二時ごろ、揚子江を航行中に私の身体に大変なことが勃発したのでありり

ます。私は、入隊以来、実に不眠不休自分の体力の続く限り、任務を敢行して責務を果たすべく頑張って来ましたが、突然、胸が苦しくなり大変多量の喀血をしたのであります。

直ちに、軍医官の診察を受けるとともに、上官その他、関係者で協議の上、私の代行者を決め、詳細な病状不明のまま、午後二時ごろ上海に到着、直ちに上海の病院に入院しました。

上海の病院は、倉庫を改造した建物であり、相当広大な場所ではありますが、病院としての機能は皆無で、その上、軍医官看護婦が不足しており、臨時要員として地元の婦人団体の方々が、看護補助員として応援を申し入れ、全員が不眠不休の涙ぐましい活動の現状でありました。ちょうどそのころ、徐州戦の一段落した後とかで、前線の傷病兵が送りこまれ、病室が満員で長い廊下が一杯となり、手当てのすべもなく重症患者は、次々と家族の名前を呼びつつ、息絶えるのを、私も目の

前で見て全くこの世の地獄図を見るごとく、いつまでもそのことを忘れることができません。

私の病状は、担当医官の指示に従い静かにしていれば、別段なんの苦痛も自覚症状もなく、ある日、私の所属部隊が杭州に向かって前進しているとの情報を聞きましたので、軍医官にその許可を請願しましたが、そんなことは絶対に拒否され、やむなく思い止まりました。

今、静かに考えますと、その時が、私の運命の転換をしたのでした。

○私の所属部隊の志摩部隊長以下、将校は一名残らず全員が戦死しました。

○私の代行者及び部下のほとんどは、無事に帰還したのであります。

○私の実弟、小山三郎（私と二歳下）が現在生存していれば八十四歳ですが、日中戦争の最初に応召して、徐州の郊外の柳林洲で昭和十五年五月二十七日に戦死

していたのを私は、自分が帰還してから初めて知ったのであります。

昭和十八年七月十日、私は広島陸軍病院、京都深草陸軍病院京都高野川陸軍病院を経てようやく帰還したのであります。

私は、現役時代を含め、ほとんど私の人生を戦争のため、苦労をしてきましたが、こんな無益な苦労と犠牲は再びしてはならないことを未来、永ごうに誓うものであります。